
令和2年度 いじめの未然防止実践研究パイロット事業

実施報告書

教職員のいじめの認知力や対応力等の向上、児童生徒の社会性の育成及び学校、家庭、地域におけるいじめ防止の意識の醸成を図ることを目的に指定校が取り組んだ実践をまとめたものです。

<事業実施校>

上越市立和田小学校

上越市立浦川原小学校

燕市立燕西小学校

長岡市立中之島中央小学校

三条市立長沢小学校

村上市立保内小学校

佐渡市立相川小学校

阿賀町立三川小学校

新発田市立加治川中学校

粟島浦村立粟島浦中学校

新潟県教育庁生徒指導課

1 取組の実際

当校は全校児童 110 名の小規模校である。学校生活の様々な場で縦割り班活動を取り入れ、全校児童が仲良く、協力して活動を行う場を設けている。その結果、休み時間など学年を超えて仲良く遊ぶ姿が見られる。また、上級生のリーダーシップ、下学年のフォロアーシップも学校生活の随所に見られる。その反面、幼少期からずっと同じメンバーで過ごすことが多い環境から、特に同学年の中で人間関係が固定化しがちで、上下関係やグループ化形成の傾向が見られる。異学年集団での活動をさらに発展させて「相手の立場を考え、思いやりの気持ちを持って接する態度」を育み、さらに同じ学年の友達に対しても、相手を尊重し、協力し合い、成功体験を積み重ねることで、よりよい人間関係の形成を目指した取組を進めていく。

(1) 全ての児童が活躍し、自己有用感を高めることのできる「縦割り班活動」の工夫

ア「水鉄砲バトル」(7月)

コロナ禍で様々な行事や活動が中止・縮小されていく中で、児童が「楽しみながら協力できる活動」を実現させるべく新たに企画した。縦割り班対抗で、水鉄砲と水風船で対決した。上学年の作戦に従い、他学年児童が自分の役割を果たしながら、思い切り楽しむことができた。

イ「やわらぎスポーツミーティング」(9月)

春の運動会が中止になったため、午前日程のミニ運動会を計画した。その中で全校縦割り班種目として立ち幅跳びリレーを実施した。事前練習の機会を設け、縦割班メンバーの仲間意識を高めた。高学年児童が低学年児童に跳び方のアドバイスをしたり、上手にできている児童を賞賛し合ったりする姿が見られた。

ウ「全校遠足」(10月)

縦割り班で、高田公園までの片道約5キロのコースを歩いた。高田公園では班ごとに遊ぶ内容を決め、仲良く遊ぶことができた。班の中で学年ごとに役割分担を決め、全員が班のみんなのために責任のある行動をすることができた。

エ「やわらぎスノーフェスティバル」(2月)

3学期も「みんなで協力する楽しい活動」を設定したいという思いで新たに企画した。縦割り班ごとに協力して、90分かけてグラウンドに雪像を作った。雪を掘る、積み上げる、形作る、色を付けるなどの作業を、全学年の児童で分担し、協力して作業する姿が見られた。



<水鉄砲バトル>



<全校遠足>



<スノーフェスティバル>

(2) 同学年の仲間の絆を深める活動の工夫

ア「仲間づくり活動①」

「国立妙高青少年自然の家」の指導員をお迎えし、低・中・高学年ごとに1校時ずつ「仲間づくり体験活動」を行った。友達と協力しないと解決できない課題に挑戦した。

イ「仲間づくり活動②」

「妙高アドベンチャーファシリテーター」の指導員をお迎えし、5学年と6学年を対象に、それぞれ約3時間、「妙高アドベンチャープログラム(体験学習を通して人と人とかかわりながら、生きる力と豊かな心を育み成長を促すプログラム)」を行った。

2 成果

(1) 取組による効果

【児童】

※学校生活アンケートより、肯定的評価の割合

「楽しく遊んだり話したりする友達がいる」 前期 94.5% → 後期 97.2%

「誰とでも協力して活動している」 前期 87.3% → 後期 90.6%

「縦割り班で楽しく活動できるように行動している」 前期 88.2% → 後期 93.4%

仲間づくり活動を通じて、普段仲よくしている友達だけでなく、学級内の全ての友達と協力して課題に挑戦する活動を行い、成功体験を重ねることで、新たな友達関係も見られるようになり、交友関係が広がった。

【教職員】

今回の仲間づくり活動を行ったことで、学級内の雰囲気はよくなったことを実感することができた。今後も今回のようなプログラムを学級活動等で取り入れ、継続して仲間意識を高める取組を進めていこうとする意識をもつことができた。

【保護者・地域】

各種行事の中止や縮小で学校にお出でいただく機会がほぼなかったが、新たな行事について事前に保護者や地域に紹介し、当日は児童が楽しく、協力しながら活動している様子を見ていただくよい機会となった。保護者アンケートでは、「子供が友達と一緒に思い切り楽しめる行事を新たに企画していただき、うれしく思う。」との記述があった。

(2) 特に効果が見られた取組例

○ 同学年の仲間の絆を深める「仲間づくり活動①」

中学年は、「心と体の安全」「公平・公正」「チャレンジ」「一生懸命」「楽しむ」の5つを約束に取り組んだ。2人組で協力する活動や、数人の仲間で協力してクリアを目指す活動などを行った。みんなで話し合いながらミッションをクリアしていく過程で、協力することの大切さや、成功したときの満足感を味わうことができた。うまくいかなかった課題もあったが、その原因を話し合い、解決に向けて再挑戦する体験もでき、学級内の絆が高まったと感じることができた。

○ 同学年の仲間の絆を深める「仲間づくり活動②」

6年生は、先回の仲間づくり活動の発展型として、「妙高アドベンチャープログラム」を体験した。活動を行う前に、講師から「目指すクラス像」を尋ねられ、目標の共有を行った。児童は「フラフープくぐり」や「新聞タワー」など、約3時間かけて10個程度のプログラムを体験した。様々な課題に対して、自分たちの力で、お互いに声をかけ合って協力して取り組む姿を見ることができ、仲間意識の高まりが感じられた。「みんなで協力して成功できてとてもうれしかった。」「相手のことを考えながら協力することの大切さを学んだ。」などの声が聞かれた。

3 課題

長年に渡って蓄積された固定化した人間関係を見直し、再構築することは容易ではない。しかし、異学年でも同学年でも、様々な人との触れ合いや協力し合う体験を繰り返していくことで、新たにその人の良さや仲間意識の大切さを感じ取ることができる。そのためには、今回のような活動やプログラムを継続して計画・実施していくことが大切である。また、活動後には必ず振り返りの場を持ち、活動を通して学んだことや、楽しかったこと、課題に残ったことなどについて意識を向けさせることが必要である。これらの点に配慮しながら、今後もよりよい人間関係を築いていける学校づくりを目指していく。



<6学年 アドベンチャープログラム>

1 取組の実際

当校は4年前に3つの小学校が統合した学校である。統合後は自他の思いや願いを伝え合ったり、協働して何かを成し遂げるためにコミュニケーションを取り合ったりすることがうまくいかず、トラブルが多発していた。また、現在保育園、小学校、中学校が地域に各1校となったため、12年間同じ仲間過ごすことで、人間関係の固定化も課題となってきた。

そこで、コミュニケーション力の育成と幅広く豊かな人間関係づくりを目指し、次の2つの取組を推進した。

①縦割り班活動を中核とした、子どもたちが活躍できる場と協働して創り上げる時間の設定

縦割り班による清掃活動での定期的な異学年交流を実施した。また、主な学校行事を縦割り班で活動する内容にリニューアルし、遠足を「なかよしウォークラリー」、運動会を「浦小なかよしスポーツフェスティバル」、文化祭を「浦小なかよしフェスティバル」、マラソン大会を「浦小なかよし駅伝」として、縦割り班で協力しながら課題解決に向かう内容にした。活動内では、課題解決に向けて、コミュニケーションをうまく取りながら、他者と積極的に関わり合う子どもたちの姿が多く見られた。また、各行事の後には、自他の良さを認め合う振り返りの時間を設定し、お互いのよかったところを認め合い、メッセージを交換し合うなどして交流を深めた。

行事を重ねていくうちに、お互いの名前を覚え、校内で声を掛け合ったり、挨拶を交わしたりといった、自然にコミュニケーションを取り合う子どもたちの姿も多く見られるようになった。

②メディア依存、メディアによる人間関係のトラブルを引き起こさないための啓発活動

子どものコミュニケーションツールとして、オンラインゲームやSNSが増加しており、それらによるトラブルの発生が当校でも増加傾向にあった。そこで、メディアに関する正しい知識理解が、よりよいコミュニケーション力を育むと捉え、メディアに触れる機会が多い高学年とその保護者を対象にした講演会を実施した。講演会では、専門家によるメディア依存の実態や正しい利用方法について、またメディアを介したコミュニケーションの取り方についての講演を聴いた後、子どもと保護者とで家庭でのルールについて話し合った。

また、年間に3回、パワーアップ週間として、家庭学習時間と共にメディアの利用時間や内容について、保護者と共に見直す取組を実施した。保護者と共に子どもがメディアルールや利用時間の目標を設定し、期間中の生活の様子をカードに記録することをとおして、子どものメディア利用の様子について、保護者の関心を高めてもらえるように啓発した。

2 成果

(1) 取組による効果

児童用の学校評価アンケートでは、

- ・クラスや縦割り班の中で自分の役割を考えてみんなと協力して活動した…肯定的評価 94%
 - ・友だちのがんばりや良さに気付くことができた…肯定的評価 91%
 - ・相手のがんばりやよさを相手（友だち）に分かるように伝えることができた…肯定的評価 85%
- と、高い評価数値であった。縦割り班による異学年交流の活動を行事に取り入れたことで、多くの他者と協働しながら目的を達成する場が増え、自他理解が深まり、より豊かな人間関係が育まれる効果があったと考える。

メディアとのより良い付き合い方についての講演会の実施は、保護者も非常に関心が高く、参加を希望する方や、次年度もこのテーマで講演会を希望する方が多かった。臨時休業中の子どもの過ごし方について、子どもとメディアの関わりへの課題がより大きくなった背景があり、今回の講演会の実施によって、家庭での課題意識を高める効果があった。

パワーアップ週間の実施は、保護者と子どもと一緒に取り組んだ家庭が98%、そのうち子どもが保護者と共に考えたメディアのルールを守れたと答えた家庭が78%となった。子どものメディアを介したコミュニケーションの様子について、家庭で見守る意識の啓発に効果があったと考える。

(2) 特に効果が見られた取組例

①「浦小なかよしフェスティバル」

<ねらい>

○なかよし班の活動を通して、異学年同士での交流を深める。

○リーダーやフォロワーとして、一人一人が役割を担い、力を合わせることのすばらしさを感じる。

1～6年生数名ずつで構成された縦割り班ごとに楽しい遊びブースを計画、作成、運営した。活動を創り上げる中で、子どもは、目的を達成するためにコミュニケーション力を発揮しながら互いの思いや願いを伝え合い、折り合いをつけ活動する姿が見られた。また上学年はリーダーシップを、下学年はフォロアーシップを発揮するなど、個々が責任をもって自分の役割を果たすことで自己有用感が高まり、積極的に活動に参加する子どもの姿が多く見られた。

活動後は、お互いに見つけた相手の良かった姿を「いいねカード」(図1)に書いて伝え合う活動を実施した。自他のよさを可視化し、再認識することで、子どもは自己肯定感を高め、自分に自信をもつとともに、他者と関わることの楽しさや心地よさを味わうことができた。

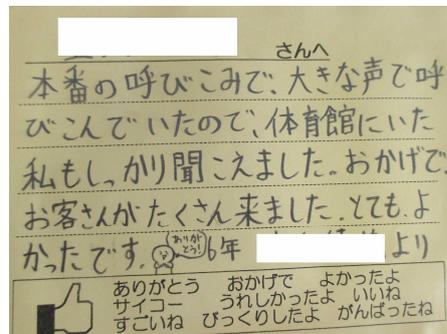


図1：いいねカードの記述

②「メディア学習会～講演：ハマるってどういうこと?～」

<ねらい>

○高学年の子どもと保護者が共にメディアとの関わり方や上手な利用の仕方を学び、これからのメディア利用について考える機会とする。

○正しいメディアのルールについて学び、メディアを介したコミュニケーションの取り方について振り返る。

新潟県立看護大学精神看護学助教 安達寛人様を講師としてお招きし、スマホの使い方、SNSにまつわる対人関係、ネット・ゲーム依存関連など、ネットやスマホの使用をめぐる問題について、具体的な事例を交えながら、うまく関わる方法や利用の仕方についてお話していただいた。(図2)その内容をもとに、子どもと保護者が共にこれからの関わり方について考え、これからの生活にいかそうとする意欲付けができた。

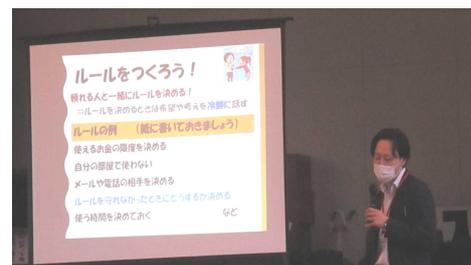


図2：メディアについての講演会

【保護者の声】

今を、そしてこれからを生きる子どもたちにとって、ネットとのつながりというのは切っても切れないツールの1つになっていると思う。便利な反面、危険な部分を理解し、不安があるときは顔の見える相手にSOSを出すということをしっかり学んで欲しい。何より人と人とのつながりを一番に、豊かな心を育ててもらいたいと強く思う。

【子どもの声】

インターネットゲームは、ネットだけの人とお話できて、現実の人々の関わりが悪くなったり、勉強をしないと成績低下につながったりすることを知りました。将来、自分がスマートフォン等を使う時、メディアを見る時間やルールを守って使っていきたいです。

3 課題

年度初めに新型コロナウイルスによる臨時休業、その後の新しい生活様式に則った学校生活と、子どもの交流活動が今まで通りにいかない現状が続いている中、より良い人間関係を構築する交流活動の方法は今後も模索していかなければならない。また、GIGAスクール構想がいよいよ実現する中、Webを使った子ども同士の交流など、新しいコミュニケーションの方法や人間関係の構築の仕方が加わることも予測される。いじめの未然防止に向け、縦割り班活動等で協働して創り上げる時間などを通し、子どもの温かみある人間関係づくりを継続すること、そして、学校、地域、保護者、子どもが様々なメディアをコミュニケーションツールとして正しく活用する力をつけること、人間関係の構築やメディアによるトラブルの未然防止に向けた学びをさらに深めることを今後の課題とする。

1 取組の実際

燕中学校区（燕中、燕東小、燕西小、燕南小、燕北小）では、平成28年度から合同学校保健委員会を開催している。平成27年度から燕南小学校で「眠育」（睡眠教育）が行われ、その後中学校区でも「眠育から始まる生活習慣の改善」をテーマに取組を進めるようになった。遅刻や欠席、不登校の増加、また、朝から「疲れた」「だるい」と訴える子どもが見られることから、生活習慣の乱れの改善が早急に求められている。しかし、眠育を進めていくにあたり、実践行動化に至らない要因として「メディアの影響」が大きいことが課題としてある。特にSNSの利用に関しては、友達関係がいじめに発展する危うさもあり、眠育と合わせて指導していかなければならない。こうした背景を踏まえ、次のような取組を進めた。

(1) 中学校区眠育指導計画に沿った指導

平成30年度に中学校区の「家庭、健康安全教育部」で検討し、小学1年から中学3年までの題材一覧を作成した。今年度も各学校の実態に合わせ、主に学級活動として実践している。

学年	題材名
小学1年	睡眠の効果「眠って元気」「体をなおす」
小学2年	睡眠の効果「脳を休める」「記憶する」
小学3年	「体の中の時計」「3つの光」
小学4年	「浅い眠りと深い眠り」「睡眠と成長ホルモン」
小学5年	「心の健康に関わる生活」「安全に行動する力」
小学6年	「抵抗力を高める生活」「良い睡眠と生活習慣病予防」
中学1年	メディアをコントロールしよう
中学2年	睡眠の効果を得よう
中学3年	勉強によい睡眠を手に入れよう

(2) 講演会の実施

情報化社会と上手につきあう子どもを育成するために、大人が学ぶ場として静岡大学の塩田真吾准教授を講師に「SNS との上手なつきあい方～タイムマネジメント～」について講演していただいた。新型コロナウイルス感染症対策として、新潟県と静岡県をリモートでつなぎ、各教室に小集団で集まり実施した。（11月30日 18時～19時45分 参加者60名）

塩田准教授は、情報モラル教材「SNS ノート」を開発するなどSNSと子どもの関係について研究されている。自覚と自立を目指した指導を大切にされており、メディアの「使いすぎ」を自覚させる指導方法を紹介していただいた。カード比較分類法を用いた「何時間使用していると使いすぎと考えるか」の問いには「1時間、2時間、4時間、6時間、8時間」の選択肢が用意され、選んだ理由等について話し合いを進めていくと、大人でも認識のずれが見られた。また、使いすぎの「見える化」として、24時間分の時間の使い方をカードに記録させ、友達との比較により気付いたことを書き出すことも効果的であることも示していただいた。「もしかしたら自分も使いすぎているのかも…」という自覚を促すことができる内容であった。

2 成果

(1) 取組による効果

燕西小学校で今年度実施した眠育に係る取組での変容は、以下のとおりである。

健康チェック強調週間の結果	R元5月	R元9月	R元1月	R2 5月	R2 9月	R2 1月
眠育達成率	65.0%	65.2%	60.3%	58.1%	69.9%	66.7%
メディア達成率				58.1%	74.0%	79.5%

(実施期間7日間の内、5日以上目標時刻や時間を守られたら「達成」としてカウント)

昨年度の結果と比較して、眠育についてはやや上昇した。新しく取り組んだメディア達成率は、2学期以降大きく上昇し、メディア使用意識の向上が見られた。今後も眠育と同時にメディア使用についての指導も継続して取り組んでいく。

また、講演会に参加した保護者・教職員からは、「時間の使い方は必ず身に付けたいし、子どもにも身に付けてほしい。時間＝命、小学生の内からその大切さに気付くのは難しいかもしれないが、ぜひ家で子どもたちと話したい。」「時間を見積もる、経験を積ませるということと、約束を守れないシチュエーションを考えることとなるほどと思った。「気を付けなさい」というだけで終わらせず、子どもに寄り添って考えていきたい。」など多数の肯定的な感想が寄せられた。それらの感想とともに、メディアの使い過ぎの自覚が、睡眠時間の管理だけでなく、正常なSNS使用にもつながり、SNSによるいじめの未然防止にもなることを「学校保健委員会だより」で保護者に紹介した。

(2) 特に効果がみられた取組例

燕西小学校6年では、「良い睡眠と生活習慣予防」の題材において、「脳と生活リズム」について学習した。脳を3階建てのビル(1階:命・生活リズム、2階:感覚・バランス、3階:考える)に例え、「脳ビル」模型として提示し、「1階の脳幹がぐらぐらするとどうなるか?」について、実際に模型を使って説明させた。子どもからは「土台を安定させないとすぐに崩れてしまうので、改めて生活リズムを整えることは大切だと思った」などの考えが出された。また、「生活リズムが整うと、どんなよいことがあるか?」という問いに、「授業に集中できる」「友達と楽しく過ごせる」という意見が挙げられた。今年度6年生の睡眠達成率は1回目68.4%、2回目75.8%、3回目77.1%と変容が見られており、今後も「なるほど」と子どもが納得し実践意欲につながるような教材を工夫していきたい。



3 課題

「眠育から始まる生活習慣の改善」を目指した本事業の成果は少しずつ見えてきているが、今後の課題としては、以下のことが挙げられる。

- (1) 講演会から学んだ、メディア使用時間の自覚の必要性から、従来使用している眠育チェック表に、メディアの使用時間を色で塗らせたり、使用したアプリやコンテンツを記録させたりすることで、メディア使用の「見える化」を図る。自覚を促すことにより、睡眠やメディア使用のタイムマネジメントの能力を身に付けさせていきたい。
- (2) 来年度は「眠育から始まる生活習慣の改善」をテーマに取り組んで5年目となる。主に学級活動としての題材を作成してきたが、いじめ未然防止の観点から、SNSの上手な使い方等、メディアの使い過ぎの自覚を促す題材を加え、生活科や保健の学習、特別の教科 道徳と関連させながら、より効果のある指導計画となるよう改善を図っていく。

1 取組の実際

これまでの学校生活アンケートやQ-U調査の結果から、学校生活への満足度や自己肯定感の低さ、人間関係スキルが未熟であることが、いじめを生む一因となっていると捉えた。今年度新たに策定した学校教育目標「みんなの幸せを創る子」に基づき、グランドデザインでは、「できる」「つながる」「創り出す」の3つの柱で教育活動を推進することとした。そして、この3つの柱に基づいて、当事業では、以下の3点に取り組んだ。

- ① 自己肯定感を高め、よりよい人間関係づくりを目指した「できる」「つながる」「創り出す」を柱にし、学校行事や主な教育活動を中心とした、第1～7期の「生活期」の実践
 - ・キャリアパスポートを活用しためあての設定と振り返りや、家庭との連携
- ② 児童が主体的に取り組み、他者との人間関係を構築し円滑なコミュニケーションを可能にする「人間関係スキル」を高める特別活動の推進
 - ・縦割り班活動での遊びの計画等の定期的、継続的な実践
- ③ 児童の実態を的確に把握し、指導に生かすための職員研修の推進
 - ・Q-U調査の分析と活用
 - ・かかわるワークショップや対話の授業の実践
 - ・外部講師による職員研修

2 成果

(1) 取組による効果

- ① 学校評価アンケートの結果（肯定的評価について、7月と12月の比較）から肯定的評価が伸びただけでなく、4段階評価の「あてはまらない」が減り「とてもよくあてはまる」が増えている項目が多い。
 - ア 学校生活への満足度に関する項目（取組①、②の成果を見る指標）
 - <児童>「学校に来ることは楽しい。」 87%→90% ※「よくあてはまる」51%→54%
 - <保護者>「お子さんは、楽しんで登校していますか。」 95.8%→96.1%
 - イ 自己肯定感に関する項目（取組①の成果を見る指標）
 - <児童>「自分のよさを見つけ、のびそうとした。」 85.0%→86.0%
 - <保護者>「お子さんのよさを認め、ほめていますか。」 90.8%→93.9%
 - ウ 主体的に取り組むことや他とのかかわりに関する項目（取組②の成果を見る指標）
 - <児童> 「縦割り班で活動する時、同じ班の人と声を掛け合い、協力して活動した。」 87.0%→89.0%
 - <保護者>「お子さんは、学級や学年、縦割り班など、仲間とのかかわりを楽しんでますか。」 95.7%→97.3%
- ② Q-Uの結果から（学校平均値の6月と12月の比較）（取組①、②の成果を見る指標）学校生活満足群については、全国平均を大きく上回る数値が出ており、6月と比べ12月はさらに伸びている。
 - 学級生活満足群 60.0%→69.9% 非承認群 19.7%→13.2%
 - 侵害行為認知群 9.3%→5.7% 学級生活不満足群 11.0%→8.5%
- ③ いじめ認知報告件数
令和元年度 16件 → 令和2年度（1月末現在） 1件

(2) 特に効果が見られた取組例

- ① 3つの柱を具現する教育期の取組
年間の主な学校行事や教育活動が、「できる」「つながる」「創り出す」の3つの柱のどれに位置付くのかを明確にした。それをキャリアパスポート「長岡夢タクト」を活用して、めあてを設定したり振り返りをしたりして、活動のあゆみが蓄積できるようにした。
また、学級ごとに自分たちが「できた」「つながった」「創り出した」ものは何かを話し合った。2月の全校朝会で全学級が発表し、全校の様子でよくなっている様子を確認し合った。

- ② 互いのかかわりを大切にした縦割り班（わかたけ班）活動の推進
令和元年度までは、縦割り班清掃と、年1回のわかたけウォークラリーが活動の中心であり、児童が自分たちで計画・運営する取組は少なかった。その反省に立ち、令和2年度は、以下の点に重点的に取り組んだ。

ア わかたけ班遊び

月1回程度のわかたけ班遊びを各班で内容を計画し、実施することにした。

イ 清掃活動での取組

清掃の反省会で、清掃中に声をかけ合って協力して仕事をしたかを評価し合ったり、互いのがんばりを発表し合ったりすることを取り入れた。上学年が下学年の世話をしながら仕事をしたり、反省会で互いのがんばりを発表したりする姿が増えた。

- ③ 6年生の発案による「秋祭り」

コロナ禍の中で、活動が制限されたり、学校行事が中止となったりしたために、児童のつながりを大事にし、互いの幸せを創り出すことが一層大切になってきた。

そんな中、6年生が、総合的な学習の時間の中で、今自分たちがみんなのためにできることは何か、プロジェクトを立ち上げて取り組んだ。中之島地区商工会、中之島コミュニティーセンター、JA南蒲、凧組合等にも働きかけ、それらの皆様からも協力をいただいて、取り組むことができた。缶倒しや風船釣りなどの自分たちで考えたお店、グラウンドでの大凧あげ、地域の方のクラフトコーナーや出店等を通して、楽しい時間を過ごし、自分たちで活動を創り出したり異学年でのつながりを深めたりすることができた。下学年からは、6年生に対して、秋祭りへのお礼の手紙を届ける取組も見られた。

- ④ 職員研修

当校は、若手教員や臨時教員が学級担任の半数を占める。Q-Uの結果の解釈の仕方や、分析結果を学級経営にどう生かすか、児童の様子をどう受け止め、どう対応していくかという点で、職員の力量アップを図るため、当事業の一環として、以下の3つの研修を行った。

ア Q-U研修

これまでも学級担任がQ-Uの結果の集計を自身で行ってきた。しかし、結果を職員間で共有する部分やより詳しい分析を行う部分に弱さがあった。そこで、職員研修に外部講師を招聘し、分析方法や分析結果の生かし方を学んだり、年2回のQ-Uの結果を職員全体で共有したりした。

その中で、学級の全体的な傾向だけでなく、不満足群、非承認群、侵害行為認知群に位置する児童が2回の調査でどのように変容したか、改善が見られた児童にはどのような支援が有効だったのか等を検討していくことが重要であることを確認することができた。

イ 「対話」研修

保護者や地域の方にも参加を呼び掛け、外部講師を招聘して実施した。相手に自分の気持ちを伝え、お互いに分かり合うことをねらいとした「対話」のワークショップを行った。参加者からはとても好評をいただいた。教師自身も日頃の学習や生活の中で児童の気持ちを引き出すための肯定的な言葉かけや、児童が自分自身を見つめ直すための支援のあり方を理解するためのスキルアップを図ることができた。

ウ UDL研修

児童が様々な変化に向き合い、他者と協働して課題を解決し、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするために、UDLの視点から、外部講師から講義いただいた。新学習指導要領で求められていることが、より明確になった。

3 課題

- (1) より個に目を向けた取組の重要性

アンケートでは自己肯定感が増した児童が増え、Q-U調査では学級満足群が増えて、全体的によい傾向が見えてきている。その一方で、気になる児童、学校生活不満足群等の支援が必要な児童も今までよりも明確になってきた。それらの児童に教師が目を向け、その児童に寄り添ってより具体的に支援をしていく必要がある。

- (2) 児童が自分たちで活動を創り出す場と時間の確保

コロナ禍でいろいろな制限がまだ続いている。その中で、児童が自ら考え創り出す、価値ある活動ができる場と時間をいかに確保するか検討していく必要がある。

令和2年度 いじめの未然防止実践研究パイロット事業 実施報告書

学校名 三条市立長沢小学校

1 取組の実際

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、教育活動の見直し、休校や行動の制限、学校だけでなく児童を取り巻く家庭・地域社会が大きく変わる1年になった。環境の変化や感染症への不安から、ストレスを抱える児童への支援が一層求められることが予想された。その不安やストレスが、いじめ等不適切な行動につながらないように、「自分自身のよさに気づき、互いを認め、高め合おうとする集団づくり」を基本方針として、まず、学級経営の充実に重点をおいた。一人一人が活躍する場や、よかったことを互いに伝え合う場を設定し、児童の自己肯定感を高めるようにした。そして、縦割り班活動から全校集会へと、感染症対策に配慮しながら徐々に他学年へと活動の集団を広げていった。児童が人権について正しく理解し、「いじめを許さない・見逃さない」意識を持ち続けることができるよう、定期的に人権集会や全校道徳を実施し、互いの考えを交流する場を設定した。そして、自身の行動目標を作成させ、実践の意欲を向上させた。また、取組の内容や方法について、職員が定期的に情報交換を行いながら、以下のような活動に取り組んだ。

月	主な取組	
4月	学級開き 縦割り班顔合わせ 心の体温計① 職員研修①（新型コロナウイルス感染者への差別について）	学級経営の充実 児童の情報交換
5月	職員研修②（いじめの基礎知識） 心の体温計②	
6月	人権集会①（いじめ見逃しゼロ宣言） Q-U検査①	
7月	全校道徳①（いじめ） 教育相談①	
8月	職員研修③（人権教育） 職員研修④（Q-U活用講座 講師：新潟大学教職大学院准教授 田村和弘様）	
9月	親子講演会（講師：NAMARA 高橋なんぐ様） 心の体温計③	
10月	職員研修⑤（いじめ対応力向上） 心の体温計④	
11月	全校道徳②（「言葉のもつ力」を考えよう） 深めよう絆スクール集会（6年生参加） Q-U検査② 教育相談②	
12月	人権集会②（いじめ見逃しゼロ宣言） 児童会行事「この指とまれ」 メディア講演会（講師：長岡市教育委員 大久保真紀様）	
1月	職員研修⑥（ネット社会の光と影 講師：上越教育大学准教授 島津弘次様） 心の体温計⑤	
2月	心の体温計⑥	
3月	児童会行事「6年生を送る会」	

2 成果

(1) 取組による効果

① Q-Uの結果

項目	第1回（6月）	第2回（11月）
学級満足群	70.8%	81.1%
要支援群	3.8%	0.9%

② 保護者による学校評価

項目	第1回（7月）	第2回（12月）
子どもの命や人権を大切にする教育を進めている。	95%	96%
温かい学級づくりや人間関係づくりに努めている。	95%	93%

（肯定的な回答の割合）

(2) 特に効果が見られた取組例

① いじめを生まない学級集団をつくろう ～Q-Uの効果的な活用～

6月に実施したQ-Uの結果を分析し、2学期の学級経営に生かそうと、新潟大学教職大学院准教授 田村和弘様を講師に迎え、職員研修を実施した。Q-Uの概略、分析方法の基本的な内容に加え、「いじめと学級の状況の関係」「コロナ禍での学級づくり」など喫緊の課題についても講義をしていただいた。受講後、職員でグループワークを行い、「2学期の学級経営のポイント」について話し合った。「1学期に決めた学級のルールを確認する」や「行事の前に、ゴールのイメージを持たせる」など、学級の実態や発達段階に合わせた具体的な取組について考えることができた。この研修を生かし、どの学級も2学期をスムーズにスタートさせることができた。



職員のグループワーク

② 言葉のもつ力を考えよう ～全校道徳～

学校生活の中で、乱暴な言葉や、相手を傷つける言葉を使っている児童の姿が見られた。そこで、言葉の持つ意味について考える「全校道徳」の時間を設定した。「心プロジェクト」部の職員が、「体や心を傷つけるのは暴力だけではないこと」、「乱暴な言葉は相手の心だけでなく自分の心も傷つけてしまうこと」について全校を対象に講話をした。その後、いじめゼロをめざす「学級のめあて」の話し合いの場を設定した。各学級のめあては、毎日目に触れるように玄関近くに掲示した。

職員も自身の言葉遣いについてふり返り、児童の手本となり「さん」付けを徹底すること、授業中の丁寧な言葉遣いを実践することを確認した。授業中の丁寧な言葉遣いが定着することで、児童は友達の話をしっかり聞く態度を身に付け、児童間のトラブルが減ってきた。



全校のめあての掲示

③ ゲームやメディアのマナーを考えよう ～メディア講演会～

教育相談の中で、ゲームに関する困りごとを訴える児童が中学年で増えてきた。ゲームで仲間外れにされる、「死ぬ」「消えろ」など嫌な言葉を言われるといった内容である。外出自粛の影響もあり、児童がゲームやネットに触れて過ごす時間は増えている。また、ゲームやメディアの内容も日々変化している。そこで、長岡市教育委員の大久保真紀様を講師に、児童と保護者向けの講演会を行った。講演会を聞いた後、児童にメディアの使い方について家族と話し合うよう促した。冬休み明けのアンケートでは、「ゲーム等でいやなことがある」と答えた児童はほとんどいなくなった。保護者から、「子どものゲームの様子を見守るようになった」「(不適切な言葉を使っている友達に) そんな言葉使っちゃだめだよ、と注意する姿が見られるようになった」など、家庭での変化を知らせていただいた。



親子メディア講演会

3 課題

- いじめに関する正しい認識を、保護者、地域住民とともに学び続ける必要がある。児童一人一人の自己肯定感・自己有用感を高めることがいじめの未然防止につながることで、いじめは一部の児童の問題ではなく、いじめを許さない社会や集団をつくるのが大切なことなど、学校、保護者、地域が一体となって取り組む必要があることを今後も発信していく。
- G I G Aスクール構想の運用など、児童がネットを活用する時間はますます増えることが予想される。いじめの未然防止の観点でも情報モラル教育を継続し、実践を積み重ねていく。

1 取組の実際

昨年度まで、からかいや悪口などの言葉を言われたことによるいじめの訴えやお互いの気持ちの行き違いによるトラブルなどの児童の実態が見られた。また、いじめアンケートや教育相談から出てこない女子同士の無視などの児童の困り感や訴えもあった。そこで今年度は、児童同士の好ましい人間関係づくりやいじめに対する職員の対応力の向上に力を入れて取り組んできた。

(1) 豊かな心を育むよりよい人間関係の形成を目指す集団づくり

① 職員向け研修会

講師 村上市教育委員会指導主事 仙田 満 様 (1月25日実施)

内容 Q-Uを活用したよりよい人間関係形成を目指す集団づくりについて Q-Uの見方についてお話をいただき、結果の理解、今後の取組について意見交換を行った。

② よりよい人間関係の形成を育む授業づくり(各学期:学級活動1時間)

1学期……インクルーシブ教育の視点から、交流学級担任と特別支援学級担任で支援を要する児童理解に関する授業を行い、児童の人権意識の向上を図った。

2学期……人権週間にあわせて、ソーシャルスキルトレーニングを提案し、友達との好ましい関わりについて考えさせた。

3学期……学級集団づくりや自分の成長を意識したエンカウンターを提案し、全校一斉で行った。

③ あいさつや友達との関わり方を通した好ましい関係づくり

月に1回程度、あいさつ及び友達と仲よくするための行動を意識して実施する期間(ハートフル週間)を設け、めあてを立てて取り組み、振り返りをさせた。

(2) 教職員のいじめの認知力や初期対応力の向上

① 職員向け研修会

講師 上越教育大学教授 高橋 知己 様 (5月26日実施)

内容 いじめの早期発見、未然防止について 予防対策のための見守りのポイントや早期発見のためのポイントについてお話をいただいた。

② いじめ対応力向上研修(夏季休業中の自主研修及び8月21日実施)

県から出された資料をもとに、早期発見、初期対応、その後の対応について考えた。

③ 情報共有シートを活用した適応指導集会の情報共有

学校の職員全員が、いじめ・不登校につながりうる子どもの気になる姿について記入できる情報共有シートを活用し、週に一度の適応指導集会で情報共有を図った。

2 成果

(1) 取組による効果

① 児童に見られた成果として

あいさつや友達との関わり方を通した好ましい関係づくりに重点をおいた「ハートフル週間」において、取組期間中、自分のめあてを8割以上達成する児童が、前期、後期とも全校で95%であった。めあての立て方も、初めの頃は教師が示した例(「さん」づけをする。「ありがとう」を言うなど)を見て取り組む児童が多かったが、回を重ねるにつれ、「目を見てあいづちをうちながら話を聞く」「相手がいやだと思ふことはしない、言わない」など、相手の気持ちを考えためあてを自ら立てる児童が増えてきた。

② 職員に見られた成果として

いじめ対応力の研修や情報共有シートを活用した情報共有を継続することで、当事者の児童や周りの児童の訴えや行動から、職員がいじめにつながるものを見取る力が向上した。昨年度のいじめの認知件数10件中、学校の教職員が発見した件数は4件であった。今年度の

いじめの認知件数は2月中旬現在7件である。7件すべて教職員が発見した事例であり、早期発見が早期解決につながっている。

(2) 特に効果が見られた取組例

① いじめに関する研修会と情報共有シートの活用

上越教育大学の高橋先生からは、いじめの早期発見、未然防止の大切さについてご講演いただいた。予防対策のポイントとして、教職員が児童と「トイレを共有」して日常での見守りを継続する大切さを教えていただいた。早期発見のためのアンケートの内容や方法については、いじめを訴える児童だけが記述するのではなく全員が記述するなど書かせ方を工夫したり、家庭で実施したり、無記名で実施したり、「投影法」という方法で文章完成法テストを実施したりした。「悪口を言われる」「ゲームで仲間はずれにされる」などのアンケートの記述から、いじめを発見し、その後の指導につなげることができた。被害者の保護者対応として、「どうしてほしいですか」と気持ちに寄り添った言葉がけをすることなど、日々実践できる内容であった。その他、「新潟県いじめ対応総合マニュアル」等を使って、いじめ対応力向上研修を行い、大切なポイントを職員で話し合った。

日々の情報共有シートをもとに、児童の情報の共有化を図った。このシートをもとに、毎週行う適応指導集会では、いじめにつながりそうな事案についていじめ対策委員会等で話し合い、児童や保護者対応につなげることができた。担任一人が対応したり、判断したりするのではなく、チームで対応することの重要さが確認された。

【※1:Q-Uの承認得点】

② 好ましい人間関係づくり

学期に1回、全校一斉に好ましい人間関係づくりの授業を意図的に位置づけた。テーマを「相手に対して」にしぼって実施したところ、どのように声かけをしたらよいか、これからどんなことに気を付けていきたいかなどを具体的に考えることができた。相手や場に合わせた気配りについて考えた6年生は、「困っている友達に気付いてあげたい」と書いていた。この授業のあと、男子児童から担任に、「ある子に対して周りの子の接し方が強い」という訴えがあった。担任が聴き取りを行ったところ、何人かの児童がある子に対してあだ名を言ったり、強い口調で話したりしていたことが分かり、いじめの発見につながった。いじめを生みにくい、早期に自分たちで解決しようとする集団形成づくりにおいても、このような授業は効果的である。

あいさつや友達との好ましい関係づくりにおいても、月に1回、全校一斉にカード(※2)を使ってめあてを立て、毎日振り返りを行った。友達との関わり方について考える時間になった。右上の表(※1)のように、Q-U結果の承認得点の問題では、肯定的な回答が、前期69.9%から後期75.1%

(全国平均62.8%)に増加した。学級の中で自分が認められていると考えている児童が増えて、好ましい人間関係づくりができるようになってきていることがうかがえる。

「運動や勉強などでクラスの人からすごいと言われる1~3年」
「運動や勉強、係、委員会、趣味などで認められる4~6年」

	6月%	11月%	全国%
1 よくある	31.6	34.5	22.9
2 時々ある	38.3	40.6	39.9
3 あまりない	21.4	15.3	23.4
4 全然ない	8.8	9.7	13.9

【※2「ハートフルカード」】

12月のハートフル活動

自分のめあて
あいさつでは
友達の名を見て元気なあいさつをする。
ハートフルでは
相手が嫌がると思わせない言葉を使う。

☆あいさつ運動(11/30~12/4 抽籤:5年生)
①教室の人、②校庭、③先生、④地域の人の1つでもあいさつしよう!
◎-①から④のうち3つツクリ、
○-①から④のうち2つツクリ、または、だれにもあいさつできなかった。

11/30(月)	12/1(火)	12/2(水)	12/3(木)	12/4(金)
◎	◎	◎	◎	◎

☆ハートフル(友達と仲よくするための行動)
◎-1日でも、○-1日でも、△-できなかった。

11/30(月)	12/1(火)	12/2(水)	12/3(木)	12/4(金)
◎	◎	◎	◎	◎

振り返り
あいさつでは
友達だけでなく先生にもちゃんとあいさつできた。
ハートフルでは
相手の気持ちを考えて生活できた。

3 課題

保護者は、自分が子どもの頃の経験から「いじめ」を「いじり」と捉えることが多い。いじめ防止基本方針をホームページなどに掲載するだけでなく、保護者会の折などで話したり、保護者や地域を対象にしていじめに関する研修会を行ったりしていくことも大切である。

ソーシャルスキルトレーニングについては、好ましい人間関係をつくるうえでも効果が見られた。全校一斉に取り組む機会を増やして行っていきたい。

学校名 佐渡市立相川小学校

1 取組の実際

(1) いじめの未然防止に向けた取組の視点

昨年度、当校ではいじめが多く発生した。いじめの未然防止が急務の課題である。そこで、児童理解を進め適切な対応をすることや居心地の良い学級・学校生活をつくるための教職員の専門性を高めるとともに、家庭・地域との連携を図れるよう次の点から取り組んだ。

- 児童会活動や学級活動をとおしていじめを許さない・見逃さない雰囲気高めるとともにルールとリレーションを確立し自己肯定感を高める。
- 社会的スキルやアンガーマネジメントの育成、よりよい人間関係の形成を目指す学級づくりに焦点を当てた教職員研修を実施する。
- いじめ問題への認識や自己肯定感を高める家庭・地域への啓発活動を実施する。

(2) 取組の実際

月	主な取組
年間	ルールとリレーションの確立を目指す学級の取組と振り返り 職員終会での情報交換（毎週）
4	1学期の学級経営計画作成・実施
6	児童会による第1回いじめ見逃しゼロスクール集会（全校） 児童会「よいこと金山」
7	Q-U調査（全学年） 第1回家庭・地域対象講演会「親にしかできない『子どもがいじめを起こさない、受けさせないために周りの大人ができること』とは何か」（講師：一般社団法人ぱすてるの一む代表理事 杉坂芳文様）
8	発達障害とアンガーマネジメントに関する教職員対象研修会（講師：杉坂芳文様） Q-U調査をもとにした学級経営に関する教職員対象研修会（講師：新発田市立二葉小学校校長 鈴木正彦様） 2学期の学級経営計画作成・実施 県民講座「子どもは未来の宝物」（講師：新発田市教育委員会教育長 工藤ひとし様）
1 1	社会的スキルとアンガーマネジメントに関する教職員対象研修会（講師：早稲田大学教育学部教授 本田恵子様） 児童会による第2回いじめ見逃しゼロスクール集会（全校） 児童の発表、講演「みんなの言葉は生きている」（講師：フリーアナウンサー 伊勢みずほ様） 児童会「よいこと金山」
1 2	Q-U調査（全学年） 第2回家庭・地域対象講演会「子どもを勇気づけられる大人とは？」（講師：佐渡総合病院小児科医 岡崎実様） SSTを取り入れた授業づくりに関する教職員対象研修会（講師：杉坂芳文様）
1	Q-U調査の分析に基づく3学期の学級経営計画作成・実施

2 成果

(1) 取組による効果

- ① 2学期末アンケートの結果で「学校は楽しいか」を問うたところ全校児童の79%（1学期69%）が「楽しい」と回答した。また「自分には良いところがあるか」を問うたところ全校児童の69%（1学期53%）が「ある」と回答した。

「学校が楽しい」については、行事の達成感や勉強がわかるようになったこと、いじめやけんかが少なくなったことを挙げるとともに、全職員が不適切な言動をした子どもに対して共

感性的にかかわったことで子どもの心が落ち着いたと考える。また「自分には良いところがあるか」の設問で肯定的な回答をする児童の割合が増加した要因は、互いに認め合う活動（「よいこと金山」等）の成果と考える。

- ② 12月に実施したQ-U調査では、全校児童の48%（7月39%）が満足群に位置し、侵害認知群は7%（7月9%）、不満足群は23%（7月1学期28%）であることが分かった。各学級で生活のルールについて話し合い、めあてを決めて取り組んだ成果と考えられる。
- ③ いじめの認知件数は徐々に減り、2学期以降は0件の月があった。
- ④ 家庭・地域対象講演会と県民講座、合わせて3回の講演会を行い、延べ約70名の参加があった。参加者の参加満足度は高く、「傍観者が動くといじめる側といじめられる側の両方を救うことができる」と聞いてなるほどと思いました」（第1回）、「自己肯定感を高める活動をたくさん取り入れていこうと思いました」（県民講座）、「聴くことが大切であることがよく分かりました」（第2回）といった感想を得ることができた。

(2) 特に効果が見られた取組例

① 「よいこと金山」（児童会活動）

児童一人一人が友だちのよい行いを小判の形のカードに書き、金山を模した紙に貼った。カードには「仕事を手伝ってくれてありがとう」などのコメントがあり、互いを認め合うことで自己肯定感の育成につながった。

② いじめ見逃しゼロスクール集会（児童会活動、学級活動）

6月の集会では、友だちとのより良いかかわりについて学級で話し合い、学級のめあてを「なかよし宣言」にまとめて発表した。そして、11月の集会では各学級の取組の様子を発表した。例えば4年生は「プラス言葉を使おう」を学級で取り組み、全校にも広げようと校内にポスターを掲示した。これらの集会活動は、ルールの確立や言葉遣いといった社会的スキルの育成に効果を発揮した。

③ 教職員研修

○ 学級経営研修（8月）

研修の主な内容は次のとおりである。

- ・ 調査結果分析では、全員のプロットの変化に注目すること。変化の要因を学級担任が把握しているかどうかを大切にすること。
- ・ Q-Uの4群それぞれの子どもの見方を深め、支援の方策を探ってほしい。また感染拡大下での家庭の問題にも注目してほしい。
- ・ 学級全体を育てることが一人ひとりの見取りや支援につながる。
- ・ 聴くに勝る支援なし。

この研修を経て、2学期の学級の取組を次例のように設定することができた。

- ・ ルール（めあて）…悪いことをしたら謝る（3年）、人のいやがることをしない（5年）
- ・ リレーション（活動）…良いところ探し（4年）、みんなで行うイベント（6年）

○ 社会的スキル・アンガーマネジメント研修（11月）

研修の主な内容は次の通りである

- ・ 怒りについての理解と対応（「出来事を整理するシート」の活用）
- ・ 社会的スキルの対象や内容

研修を通して、職員は「子どもの気持ちをまず受け入れることが一番大切であることがよく分かった。」などの学びを得て、児童の怒りを生まない働き掛けやクールダウンに役立てることができた。



3 課題

今年度の取組によって児童の怒りの解消やいじめの未然防止を進めることができた。今回実践した教育活動や運営活動（講演会、研修）の有効性が明らかになったので、これらを今後も継続していけるよう計画を立て確実に実践できるようにする。また児童の健全育成に対する家庭・地域の関心を一層広げていけるよう学校運営協議会と連携して活動を工夫していく。

1 取組の実際

昨年度、当校児童に新型コロナウイルス感染者への差別的言動が見られた。いじめにもつながる重大な事案であり、明らかなシンキングエラー（間違った考え）である。自分や家族を守るためであれば、相手を傷付けてもよいというシンキングエラーを正すことが今必要であり、それこそがいじめの未然防止につながると考え、次の取組を計画した。

- (1) 道徳科の授業に「哲学対話」の手法を導入する。（指導者：新潟大学人文学部阿部ふく子准教授）「哲学対話」とは、車座になり、テーマに対して「なんでそう言えるのか」「ちがう場合でも同じことが言えるのか」など問いを連続させて考えを深めていく対話方法である。授業では、教科書教材の登場人物が抱くシンキングエラーについて、「なんでそう考えるのか」「ちがう場面でも同様に考えていいのか」など問いを連続させて対話を行う。これによって子どもはシンキングエラーがなぜ間違っているのか協働的に検討して理解し、修正に向け主体的に行動を提案するようになると考えた。
- (2) 「三川小パイロット事業通信」を発行し、道徳科の授業記録等を通して、シンキングエラーの修正について地域・保護者に発信する（年3号）。これによって、地域・保護者から学校の取組に関心を寄せていただくとともに、地域・家庭の中に、差別的な言動には配慮していこうという意識を醸成したいと考えた。

2 成果

(1) 取組による効果（「哲学対話」によって見られた児童の変容）

① 思考の深まりと広がり

各学年で実施した哲学対話の授業で、「なんで？」や「〇〇って何？」という問いかけの発言が多く聞かれるようになった。「そもそも、いじめって何？」のような前提を問い直す発言も見られるようになり、問いを連続させてより深く思考しようという意識の高まりを感じる。また、取組後の哲学対話に関する意識調査では、「普通の道徳授業より哲学対話による道徳授業が好きか」の質問に全校の86%が「好き」と回答し、その中の78%が好きな理由を「友達のいろいろな考えが聞けるから」、47%が「今まで気付かなかったことに気付くから」と回答している。多様な意見との出会いを肯定的に受け止め、多面的・多角的に自分の思考を広げようという意識の高まりも感じる。

② 知的安全性の確保

「対話中、自分と異なる意見が出たときどう思うか」という質問に、全校の83%が「うれしい」と回答している。また、「哲学対話をする、クラスメイトとの関係はどうなると思うか」の質問に、全校の81%が「仲良くなる」と回答している。このように考えるのは、子どもが哲学対話によって、「知的安全性」を感じているからであると推察する。「知的安全性」とは、「何を話しても攻撃されたり、否定されたりすることはないという安心感」を意味する。新潟大学人文学部阿部ふく子准教授は、「何を言っても攻撃されることのない安心感が、自由な対話を促す。したがって、哲学対話が成立しているということ自体がすでに、いじめの未然防止となっている」と述べている。

これらの効果によって、各学年で実施した哲学対話の授業では、ターゲットとしたシンキングエラー（例「やられたら、やりかえしてもいい」「自分は見ていただけなので、いじめをしたことにならない」等）に気づき、修正方法を発言・記述できた子どもが80%を超えた。また、シンキングエラーに関する意識調査において、授業実施前後（7月・12月）の調査結果を比較すると、授業でターゲットとしたシンキングエラーに関係する調査項目（例「以前に自分も悪口を言われた。だから今度は自分が言ってもいいか」「直接いじめに関わっていな

い。同じ教室にいただけだが、いじめをしたことになるか」等)が、3, 4, 5年生でプラスに変容している。ここから、一度シンキングエラーに気付くと、類似の場面におけるシンキングエラーにも敏感になると言えそうである。子どもの授業における発言の中には、「理由があればいじめてもいいのか?」や「見て見ぬふりは認めていることと同じではないか?」などの言葉も聞かれ、シンキングエラーを察知し、主体的に働きかけようとする姿も見られるようになってきている。

(2) 特に効果が見られた取組例

全学年で実施した哲学対話による授業の中から4年生の授業を紹介する。4年生は教科書教材「いじりといじめ」(日文「生きる力」4年)を読んで、「仲がいいからって、(友達の失敗を)笑っていいのか」という問いを立て哲学対話を行った。(一部抜粋)

T29 笑っていいときと笑っちゃいけないときって、どういうとき?

C40 笑っていいときは、ふざけていて笑いがほしいときで、笑ってはいけないときは、その人が真剣に考えていたとき。相手が笑いがほしいときは、相手のために笑ってあげた方がいいと思う。

C41 わざとじゃないときは笑ってはいけないの?

(中略)

T32 相手が笑ってほしいときに笑うのは、いじり?

C47 いじりじゃないでしょ、いじめなんじゃないの?

T33 じゃあ、これも(教科書の場合も)いじめなのね?

C48 笑っていいときは、相手が笑ってほしいと思ったときで・・・

C49 それは、いいんだよ。(いじめとは言えない)

T34 相手が笑ってほしいと思ったときは、いじめにならない?

C50 いじりっていうのは、何だろうな?

C51 いじめって何?

T35 じゃあ、いじりといじめって一緒なんじゃないの?

C52 いじめは、仲間外しとか暴力とか。いじりは・・・あれ?

C53 私は、いじりといじめはだいたい一緒だと思います。それを言われて傷つく人がいるのは共通しているから。

C54 あー、たしかに。それはいいな。

C55 いじめは悪口とか暴力とかだけど、いじりはからかったりするのだから、どっちも人がされていやだと思うから、同じようなものだと思う。

C56 でも、いじりは流れでちょっと相手を馬鹿にするとか、ちょっと笑うことだから・・・

C57 それは、やっぱりいじめだね

C58 あー、そういうことか。

このように、自由な雰囲気の中で哲学対話が進行し、要所で教師が重層的発問(問い返し)を行うことによって、議論が焦点化される。この時間では、「いじりはいいが、いじめはダメ」というシンキングエラーが修正され、「いじりもいじめも、人からされていやなことだからどっちもダメ」と振り返りに書いた子どもが80%を超えた。

3 課題

『「いじめはいじめる方が悪い。でも、いじめられる方にも原因がある」と言う人がいます。あなたはこの考えをどう思いますか」という質問に、7月調査では全校の半数以上が「そう思う」「少しそう思う」と回答したが、授業後の12月調査でも同様の結果となった。各授業では、ターゲットとしたシンキングエラーの修正は見られたものの、「被害者にも原因がある」という重大なシンキングエラーを修正することはできなかった。子どもはなぜ被害者の言動といじめに因果関係を見出すのか、さらに詳細を分析する必要がある。

また、地域・保護者向けに「三川小パイロット事業通信」を3号発行した。地域・保護者がどのように受け止めたか未確認であるが、今後新型コロナウイルス収束後に、子ども・地域・保護者がともに哲学対話を行う場面等を設定したい。

1 取組の実際

本校の課題と目指す生徒の姿は「固定化された人間関係から脱却し、誰とでもかかわり良好な関係を築けるようにする」ことである。その具体的方策として、いじめの未然防止につなげるため、「マズローの欲求階層説」の基盤の3層を中心とした充実が大切であると考え、下記の5つの取組を行い、各種調査で検証することとした。



(1) **かかわって学ぶ授業づくり**・・・「受信・思考・発信の聴き合い学び合う授業の創造」を目指し、「一人も独りにしない」「120%支え合う」を合い言葉に授業改善に取り組んだ。新潟大学教育学部大学院の一柳智紀准教授から、10月8日と11月20日の2回にわたり、教員一人一人の授業を見て個別に御指導をいただいた。ペアやグループ、全体で課題解決に向かい、かかわって学ぶ喜びを体感する授業について全体研修を行った。

(2) **計画的な人間関係づくり**・・・hyperQUを主軸に、生徒対象の構成的グループエンカウンター（SGE）やソーシャルスキルトレーニング（SST）を、月1回程度すべての学年で学活を中心に実施した。また、8月4日には元新潟大学教育学部の吉澤克彦様をお招きし、教職員向けに個と集団の関係性分析と今後の取組について、実践的なhyperQU研修会を実施した。

(3) **生徒が生徒に働きかける生徒会活動**・・・「最高の笑顔」で「3つの喜び」を体感した体育祭や、各学級で団結して創りあげた最高の「合唱」を披露した桜加祭はもちろんのこと、生徒会が主体となった「LOVE&PEACE活動（いじめ見逃しゼロ全校集会）」や「FOR THE FUTURE OF KAJIKAWA（加治川の未来を考える会）」の企画運営により、自分たちの問題を自分たちで解決したり意識を高めたりする活動を行った。

(4) **外部講師による講演会**・・・総合的な学習の時間に外部から講師を招聘し、多様な生き方モデルに触れ、自らの生き方を考える全校「生き方授業」を下記のとおり3回実施した。

- ・第1回 6/9 『私の生き方～新発田のよさを発信する』 街角こんぼす 西村 純子 様
- ・第2回 9/10 『先輩の話を聴く会』 本校卒業生 大滝 日奈野 様、高澤 遼 様
- ・第3回 10/6 『ひなたコンサート～紆余曲折の人生に学ぶ～』 ひなた 様

また、娘さんをいじめによる自死で亡くされたNPO法人ジェントルハートプロジェクトの小森美登里様による人権講演会「命の授業」を行った。さらに、SNSや情報モラルに関する講演会等もネットいじめ等の未然防止に向け計画的に実施した。

(5) **小中連携と学校・家庭・地域の連携**・・・いじめを防止するには、心の安定につながる基本的な眠育や食育等生活習慣の定着が大切である。小中連携や学校・家庭・地域の連携に向け、地域の子育て支援クラブや幼稚園・保育園と小学校・中学校の代表や保護者を含めた学校保健委員会を新たに組織する中で、眠育を中心として取り組んだ。眠育パンフレットも作成し配付した。

2 成果

(1) 取組による効果

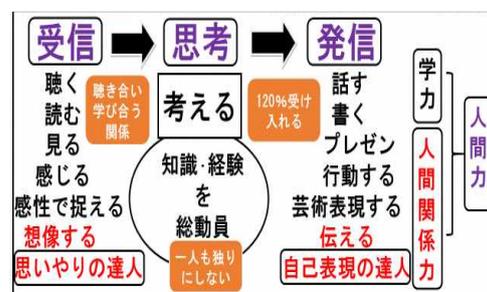
12月実施の学校評価生徒アンケートにおいて「学校は居心地がよく楽しい」「いじめや差別はどんな理由があってもいけない」の肯定的評価は100%であり、hyperQUの学級生活満足群がすべての学級で80%以上となり、ルールとリレーションの確立した親和型学級となった。5クラス中3クラスの学級生活満足群が90%以上であり、全校でも学級生活満足群が90%となり、いじめの起こりにくい集団となったことが伺える。また、「ネット上で友人から悪口や嫌なことをされる」「ネット上で仲間外しや無視される」の侵害感を感じている生徒もhyperQUアンケート上「ゼロ」となった。その他「学校生活意欲プロフィール」が90.1(全国平均77.3)、「配

慮スキル」34.9（全国平均 31.8）、「かかわりスキル」32.5（全国平均 29.0）と高値であった。5つの取組に重層的に取り組んだ結果であり、かかわって学ぶ普段の授業や自分たちで創り上げた行事等の生徒会活動、楽しそうに過ごす休み時間の様子など、生徒の姿も良好である。

(2) 特に効果が見られた取組例

①計画的な人間関係づくり・・・8月4日のhyperQU研修会では、個と集団の関係性分析と今後の取組についてグループワークの後で学級担任が発表した。それを受けて講師の吉澤克彦様よりクラス毎に具体的な御指導をいただき、大変参考になった。特に、人間関係構築プログラムであるSGEやSSTを継続的に行うことで、生徒同士のリレーションを高める素地ができることへの理解が深まった。

②かかわって学ぶ授業づくり・・・新潟大学教育学部大学院の一柳智紀准教授から「対話と共同」により一人も独りにせず、一人一人に学びを保障する「ケアの関係」について、具体的な教室の中で起こっている対話を再現する等、生徒の学びの姿で語っていただいた。本校の目指す授業構造図（右図参照）の「受信・思考・発信の聴き合い学び合う授業」の浸透につながった。



③生徒が生徒に働きかける生徒会活動・・・リーダー研修を充実し、生徒の意欲を高め、生徒の発想を大事にした指導・支援と自己評価活動を行った。結果、「今までにない加治川中を創ろう」のスローガンのもと、生徒会が主体となって創り上げた体育祭と桜加祭「合唱」は感動を呼ぶものとなり、生徒の自己肯定感の高まった姿を随所に見ることができた。また、「LOVE&PEACE活動（いじめ見逃しゼロ全校集会）」や「FOR THE FUTURE OF KAJIKAWA（加治川の未来を考える会）」において、「誰とでもかかわることができ、安心して過ごせる学校」を目指し、共有ツール「えんたくん」を使った話し合いと具体的取組により、アンケート結果から分かるように、いじめをしない許さない雰囲気醸成につながった。

④外部講師による講演会・・・講演会の中で一番効果的であったのは、ジェントルハートプロジェクトの小森美登里様による人権講演会「命の授業」である。生徒は、自己開示し、自分事としていじめられた体験やいじめをしてしまっただけで後悔している心の内を記述（右参照）しており、生徒の心に響いたことが伺える。SNS講演会と合わせて「ネット上の侵害感ゼロ」にもつながった。

（略）私もいじめをしてしまったことがあります。どれだけその人のことを傷つけたか、今でも後悔しています。私はそのことを母に話したら「ちゃんと謝りなさい」と言われ、謝りました。その子はやさしい顔で許してくれました。私はその時、こんな笑顔を自分が消してしまっていたのだと思いました。私は小さい頃からやさしい母に育てられ「優しい子になりなさい」と言われてきました。そんな私がいじめをしてしまい、この世に生んでくれた母や家族に申し訳なくなりました。私は絶対に優しい人になると誓います。（略）

⑤小中連携と学校・家庭・地域の連携・・・いじめの未然防止には心の安定が不可欠である。

望ましい生活習慣形成を幼少期から継続的に行うため、加治川地区学校保健委員会を新たに組織した。子どもたちの心と体の健康問題を協議し、初年度は「眠育パンフレット」を作成し、睡眠時間を塗りつぶす「眠育調査」を家庭との連携のもと実施した。地域の子育て支援クラブや幼稚園・保育園、小学校の保護者にも「眠育パンフレット」を配付した。学校評価アンケート結果からも睡眠の重要性が生徒と保護者の中に浸透しつつあることがうかがえる。確実に生徒の心の安定にもつながっており、これを地域全体で継続に取り組むことで、長いスパンでの成果もさらに期待できる。

眠育パンフレット（抜粋）

5 眠育の取組例

- 保護者の眠育講演会の開催（PTA事業として）
- 児童生徒への眠育授業
- 睡眠調査票を用いた児童生徒の睡眠実態調査
- 睡眠調査票の記録を基にした面談等
- PTA共通課題「家庭学習の習慣化」の取組

PTA共通
1 1年7C
2 三点園話
3 メディフ
4 双方向派
5 親子コミ
6 生活ノ
7 家庭学習

眠育調査票とその記入例

氏名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
山田太郎																															
山田太郎																															
山田太郎																															
山田太郎																															
山田太郎																															

3 課題

検証結果から、本事業により目指す生徒の姿に概ね近づいたと考える。コロナ禍で生徒は「学校で学べるありがたさや価値」を理解し、学校生活に前向きに取り組んでいる。特に3年生は、授業や生徒会活動でかかわって活動できる温かい人間関係が育っている。いじめの起きにくい状況であり、後輩の良きモデルとなっている。しかし、毎年、教員と生徒が入れ替わる中で、この状態を維持できるかが課題である。生徒の中に「伝統と校風」として根付かせ、教師集団としても「計画的な人間関係づくり」や「かかわって学ぶ授業づくり」などの手法を継承し、生徒の自己肯定感や温かい関係性を継続して高めていけるかが課題である。

1 取組の実際

栗島浦村では、島民の人口減少と高齢化が進み、児童生徒数は減少傾向にある。地域の要となる学校を存続させるため、村は平成26年度から『しおかぜ留学制度』をスタートさせた。この留学制度を利用し、全国各地から児童生徒が集まる。今年度は、小中合わせて20名の留学生を受け入れた。

留学生は、親元を離れて寮生活を送る。集団生活を送る上で相手の立場に立って考える力が不足していたり、同調圧力が働くことにより、児童生徒一人一人が抱えるストレスが問題となっていたりする。また、ここ数年、人間関係のトラブルが続いており、昨年度いじめが顕在化した。今年度、社会性の育成を学校教育の重点事項に設定し、いじめの解消に向けて全職員一丸となって取り組んできた。

いじめ未然防止の観点から、自分の意見や考えを安心して言い合い、共感し合える関係づくりは当校にとって必須であると言える。そこで注目したのが、「教育ファシリテーション」である。

(1) 教育ファシリテーション研修

9月16日(水)、NPO法人みらいず works の角野仁美様を講師にお招きし、教育ファシリテーション研修を行った。

当日は、小学生高学年6名、中学生19名を対象にした模擬授業を行っていただいた。アイスブレイクに始まり、ファシリテーションについてのレクチャーの後、「哲学対話」を紹介していただいた。「哲学対話」とは、アメリカで研究されている考え方で、話し合う課題をメンバー同士で設定し、そのテーマに従い話し合うものである。限られた人間関係の中でも『本音が言える』態度の育成を目指したものであった。振り返りでは目指す姿が具現化され、「本音が言えた」という自分への気づきが生まれた授業であった。

特に、毛糸のボールを持っている人だけが話すというルールのもと、発表する人の話を最後まで聞く児童生徒の姿から、相手の話を聞くスキルが高まっていると感じた。

今回の「教育ファシリテーション」研修では、話し合いの場における教師の役割が明確になると共に、生徒一人一人の考えを引き出す手法を児童生徒会活動や日々の授業に生かせるよい機会になった。



写真：講師の自己紹介の様子



出された意見をまとめている様子

(2) 先進校視察

文部科学省委託令和元年度「道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業」に取り組まれた小千谷市立片貝中学校様へ、視察の依頼をした。

学校の生徒数や生徒の実態は異なるが、「教育ファシリテーション」を道徳科教育に取り入れ、小さい頃から生活をし、固定化された人間関係の中でも安心して自分の考えが言える環境づくりや、生徒の思考を引き出す思考ツールの活用を目指す片貝中学校様の取組を、当校の教育活動にも取り入れていくためのものである。

視察当日、片貝中学校様は、校内研修と結び付けた日程を組んでくださり、全学年の道徳科授業を公開してくださった。さらに、その後行われた協議会にも参加させていただき、定期的に職員研修を行うことで職員間の共通理解を図っていくことや、簡単に活用できて有効である

思考ツールの紹介など、数多くの貴重な情報をいただくことができた。

視察に赴いた職員は、帰校後即、視察レポートを作成し、それをもとに伝達講習会を実施した。その中で特に強調していたのは、相手の話をしっかりと受け止める『傾聴スキル』の大切さであり、あらためて校内の教育活動の中でも職員一人一人が意識して取り入れていかなければならないことを確認し合うことができた。

(3) いじめ見逃しゼロスクール集会

6月と12月の年2回、いじめ見逃しゼロ強調月間を設定した。児童生徒会が主体となり、いじめをしない、見逃さない、許さない意識を高めることをねらいに行った。

6月は、各学年でいじめを題材とした道徳科等の授業を通しての学びを発表したり、児童生徒会が中心となって作成した「いじめ見逃しゼロ5か条」(嫌なことがあれば、相手に自分の気持ちをはっきりと伝えるなど)の確認をしたりした。また、異年齢交流活動の振り返りとして行う友達のよいところ探し「アワッター」の取組が行われた。

12月は、小中合わせた異年齢グループをつくり、いじめの未然防止の話し合いを行った。話し合いのテーマは、いじめの解決策であり、まずは自分の考えをはっきりともつこと、その考えをグループのメンバーにしっかりと伝えること、一人一人の意見を尊重することを意識して行われた。

2 成果

(1) 取組による効果

年度当初より一部の留学継続生徒に見られた話合いの場における一方的な主張は減少し、一人一人の意見を最後までしっかりと聞くという意識と雰囲気浸透させることができた。

また、いじめ見逃しゼロスクール集会の前に『傾聴スキル』に特化したソーシャルスキルトレーニングを行ったことで、各教科の授業でもそのスキルを一人一人が活用でき、安心して意見が言え、生徒同士の話合いが深まる様子が見られた。

保護者による後期学校評価項目「お子さんは人間関係を築き、前向きな学校生活を送っている」の数値は、89.7% (昨年度 80.0%) を示している。話し合う場面での日常的な取組が、教室における安心感へとつながっていると考えている。

また、留学生が生活する寮内でのトラブルも減少している。

(2) 特に効果が見られた取組例

先進校視察で職員が共有した、思考を整理し、発言内容を可視化するための手法等は、各教科の指導場面でも多用され、話し合いの活性化につなげることができた。また、傾聴スキルを意識することは、定期的実施する教育相談において、教師が生徒に寄り添いながら話を聞くスキルアップにつながった。

今年度のいじめの認知件数は2件である。この事案も当該生徒を指導、支援し、法令に沿って解消の判断に至っている。



写真：いじめ見逃しゼロ集会の様子

1年社会科の授業の様子

2年道徳科の授業の様子

3 課題

(1) しおかぜ留学制度により、クラスメートは毎年入れ替わる。そのため、まずは、新しい顔ぶれの中でお互いを知ることから始まる。話し合いの場における児童生徒のファシリテーターの育成などを年度当初から、意図的・継続的に行っていかなければならない。

(2) 「教育ファシリテーション」を行うことが目的にならないように、効果的に取り入れていく授業づくりをしていかなければならない。